

令和2年度 愛媛県総合教育会議議事録

1 開会の日時及び場所

令和3年3月17日（水）午後2時5分

三崎高等学校 会議室

2 出席者

愛媛県知事 中村時広

教育委員会 教育長 田所竜二 委員 関 啓三 委員 高田智世

委員 竹本公三 委員 峯本陽子 委員 山内満子

3 会議の概要

(1) 開 会（午後2時5分）

（事務局 副教育長） ただいまから、令和2年度愛媛県総合教育会議を開会いたします。開会に当たり、知事から御挨拶をお願いいたします。

（中村知事） 本年度の愛媛県総合教育会議の開催に当たり、御挨拶を申し上げます。旧来、教育行政は、予算の関係は知事部局で、それ以外は教育委員会が実施するものとして、権限が明確に分けられていました。教育委員会の委員の皆さんの多くは、学校の先生のOBであり、専門的な分野の議論は深まりますが、それ以外のジャンル、例えば今日のように、社会変化の著しい毎日が続く中では、なかなか現状にマッチした議論が行われにくいという課題がありました。それを受けて、現在、県教育委員会では、幅広い分野の経験者に委員として就任していただいております。

県知事や市長は、当然のことながら公約の中に、教育に関してこういうことをやりたいというプランを盛り込んでいますので、それが、数年前の法律改正により、意見交換を通じて現場にも反映されるよう制度が変わり、こうした県教育委員会と知事部局との意見交換会を定期的を開催するようになりました。

今日は更に一歩進んで、南予で初めての開催となりますこの総合教育会議に、三崎高校の先生方や生徒さんにも参加をいただき、会議を開催する運びとなりました。今日、三崎高校を視察させていただきましたが、御案内のとおり、少子高齢化が進む中で、全国でも高校の存続という大きな問題があちこちで議論されています。そういう中で、地域にとって宝である学校の存続のためには、魅力ある学校づくり、そして、地域との一体化、更にはそれに基づく対外的なPR、こういったことを、根気よくやっていないと、学校の存続に繋がらないということで、三崎高校について非常に心配していましたが、そうした気持ちが地域から沸き起こって、文部科学省委託事業の指定校として魅力づくりにチャレンジをしていただくことになりました。このチャレンジの対象は、愛媛県内では三崎高校1校でございます。そして全国でも、たった20校でございます。言わば三崎高校は県内で一つ、全国で20のうちの一つ、その

チャレンジをしている学校ということですが、今日現場を拝見しまして、その趣旨を本当に皆さん一人一人が考えながら、地域に根差した学校づくりに向けて、先生方、そして生徒の皆さんが一体となって、取り組んでいる姿を大変心強く感じたところです。本日の会では、きたんのない、皆さんが普段思っていることを、そのまま自分の言葉で言ってもらえたらと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(2) 議 事

議題 地域の未来を切り拓く人材の育成

(中村知事) それでは会議を進めてまいりたいと思います。本日は、「地域の未来を切り拓く人材の育成」を議題としております。まず、三崎高校から魅力化に向けた取組の紹介をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

(三崎高校教員) 皆さん、こんにちは。本日はこのような機会を与えていただきましたので、三崎高校が現在取り組んでいることや魅力を、少しでもお伝えできるように、精一杯頑張っただけでございますので、どうぞよろしくお願いいたします。

「みさこう さいこう さあいこう！」ということで、「みんなが さいこうに きらきら輝ける学校」づくりを進めております。三崎高校は、現在の定員60名に対し、これまで30名を切ることもあり、非常に苦戦をしていましたが、今年の1年生は倍増させることができました。これは全国的に見ても、生徒数が倍増までいくのは珍しいと言われております。その大きな要因が全国募集の開始であり、県外から数多くの生徒が三崎高校に来ていただけるようになりました。そのきっかけとして私たちが考えているのが、「地域みらい留学」という制度です。本日は、その制度を活用して県外から入学した3名の1年生も参加しています。「地域みらい留学」とはどういう制度か教えてください。

(三崎高校生徒) 「地域みらい留学」とは、高校に進学するタイミングで、自分の地元ではない高校に進学することで、新しい発見や自分を見つめられる端緒になる新しい国内留学の仕組みです。

(三崎高校教員) 今、大きく時代は変わってきています。センター試験から共通テストに変わっただけでなく、本当に大きな変化が日本中だけでなく世界中で起こってきている中、これまで必要とされた力ではないものが必要とされる時代がきています。そして、三崎高校では、時代が大きく変わる少し前からいろいろな取組をしてきました。

(三崎高校教員) 三崎高校では、6年前から地域と連携した活動を行っています。その中で、本校の活動の代名詞となっているのが「せんたんミーティング」という、県内外の高校生や大学生を、この伊方町に招いて地域活性化について話し合うといったイベントです。企画から運営ま

で、全て生徒が行っています。

(三崎高校教員) 具体的に、皆さんから三崎高校についてアピールしたいことはありますか。

(三崎高校生徒) 私が紹介したいのは、「みっちゃん大福」という商品です。この商品は、三崎高校の生徒数がすごく少なくなってしまった時に、生徒が柑橘を使って、地元を盛り上げる何かを作りたいということで、地元のお菓子屋さんと協力してできた商品です。この商品は、「こんなのあるんだ大賞」という賞をいただきました。36,000点の中からグランプリを獲得しました。おいしい商品なので、皆さん、ぜひ食べてみてください。

(三崎高校教員) ほかにはどうですか。

(三崎高校生徒) 私が紹介するのは、「みさこうたいそう115」という体操です。生徒の地元を盛り上げたいという気持ちから、計画、実行されたものです。みさこうたいそうの「み」みんなで、「さ」さいこうの、「こ」このまちを、「う」うみだそう。そして、健康寿命が115歳まで延び、みんなが楽しく元気で過ごせるように願いを込め、「みさこうたいそう115」と名付けられました。

(三崎高校教員) この「みさこうたいそう115」の曲が、いつも清掃の時間に流れていますね。ほかにはないですか。

(三崎高校生徒) 私が紹介したいのは、「みさこうCafé」です。この「みさこうCafé」は、企画、運営、販売の三つの項目を全て生徒主体で行っているカフェです。今は月に一度オープンしています。来年度も実施します。

(三崎高校教員) 皆さん、ぜひお越しくください。そして、三崎高校の特色ある取組の一つに、「みさこうDAY」という日があります。

(三崎高校生徒) 「みさこうDAY」は、私服で登校してもいい日です。

(三崎高校生徒) その目的は、私たちが社会に出た時に、TPOに合わせた服装ができるように、その練習として「みさこうDAY」という日があります。この日はチャイムも鳴りません。部活もなくて、時間を自分で考えて使う日となっています。

(三崎高校教員) 自分の興味のあることを見つけて、それにチャレンジしていく日ですね。そして、そのような様々な取組を行っている生徒たちが、着実に力を付けて、このような難しいサミットに参加したり、留学制度を使って外国に行ったりしています。また、昨年度の卒業生は、大阪大学の合格者を出すなど、進学に非常に自信を持っています。進学だけではなく就職内定率も、今年度も100パーセントを実現しており、三崎高校は、このような進路に関して本当に自信を持っています。

このように生徒たちが好きなことを、とにかく徹底的に探究していくこと。これは遊びではなく、このようなことをやり続けていくことが進路に直結しています。これが今、世の中が大きく変化している中で、必

要とされている力なんじゃないかなと思います。三崎高校では、地域と関わったり、自分の得意なこと好きなことを、個人で仲間で勉強したりしていく上で、進路に直結し自己実現につなげることができております。そして、このような活動をしていて、文部科学省から、全国20校中の1校に選んでいただきました。

(三崎高校教員) この文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」というのは、学校の中だけではなかなか身に付けられない力を、生徒を地域に出すことで、社会で必要とされる力を身に付けようというプログラムになっており、本校でも積極的に活動を行っているところです。令和3年度までの事業ですので、頑張りたいと思います。

(三崎高校教員) そして、このような活動をしていく上で、三崎高校の大きな特色の一つである「せんたん部」という活動があります。

(三崎高校教員) 「せんたん部」とは、一般的な部活動ではなく、有志による集まりになっています。授業以外の時間にも、地域おこしに積極的に取り組みたいということで、すごく自走性の高い生徒が集まったチームになっています。

(三崎高校教員) この「せんたん部」が中心となって行っているプロジェクトを、「みさこう・せんたんプロジェクト」と言います。

(三崎高校教員) 三崎高校でこれまで取り組んできたプログラムを、体系化して、持続可能なものにしていこうということで、付けられたプロジェクトの名前です。四国最西端の伊方町から最先端の取組を、という思いで、「せんたん」という名前が付けられています。

(三崎高校教員) 皆さん、取り組まれているプロジェクトはありますか。

(三崎高校生徒) 学校で採れたヤマモモを使ったジャム作りに、一生懸命取り組んでいます。

(三崎高校教員) そのジャムがカフェにも並んでるんですね。

(三崎高校生徒) 先ほど紹介しました「みさこうCafé」でも販売することができて、生徒のアイデアが徐々に形になっていくのがすごく楽しいです。

(三崎高校教員) この「せんたん部」の取組が、今年行われました「えひめ地域づくりアワード・ユース」で最優秀賞を獲得することができました。

三崎高校は、現在107名の非常に小規模な学校ですが、全国50校程度の中学校から、生徒たちがいろいろな思いを持って集まっています。卒業生の中には、高校からやり直したいとして三崎高校に入学し、卒業時には、手話の全国大会に出た生徒がいます。その生徒は、将来、学校の先生になりたいという目標を持ち、愛媛県高等学校総合文化祭の開会式でも手話通訳をするほどに成長しました。三崎高校に来て、自分を変なることができたという生徒が本当にたくさんいて、私たちのほうが、彼らから教わっていることが多いです。実際、皆さんは何か変わりました。

たか。

(三崎高校生徒) 私は、神奈川県の大規模な中学校出身ですが、そこでは、いくら自分が手を挙げて「これやりたいです」と言っても、なかなか先生に目を向けてもらえませんでした。しかし、この三崎高校は、生徒数が少ないということ、マイナスとして捉えているのではなく、プラスとして捉えているので、一人一人が輝けると思います。こういう環境にいるからこそ、中学校時代の一步踏み出せない自分を壊していける、変わることができているような気がします。

(三崎高校教員) この3人と昨年、中学生の時に出会って、そして今、こうして自分たちの学校、地域、愛媛県のことを、全国の皆さんにPRできることが、本当に幸せでいっぱいです。本当に今、世の中は大きく変わっています。三崎高校では、このような最先端の取組を行っていますが、三崎高校が素敵だなと思うのは、本当に変わらないこと、今まで古き良き時代の人と人とのつながりがあるなど、そこが三崎高校には残っていて、時代のニーズと地域の伝統がミックスされた本当に素晴らしい学校ではないかと確信しています。この佐田岬半島にある、愛媛県の真面目な高校として、これからも生徒たちと一緒に、三崎高校の魅力を少しでも伝えていけるように頑張っていきたいと思います。「みんながさいこうに きらきら輝ける学校」三崎高校でした。

(三崎高校生徒) ここで、私からお願いがあります。三崎高校には、「みさこう さいこう さあいこう！」というキャッチフレーズがあります。掛け声に合わせて、右手を高く上げていただけたら嬉しいです。みさこう さいこう さあいこう！ありがとうございました。

(中村知事) どうもありがとうございました。非常にエネルギッシュな紹介で大変楽しかったです。本日は、ただいま紹介いただきました三崎高校の取組も踏まえまして、①小規模校の魅力化、全国募集の促進、②地域と連携した人材の育成・確保、③ICT教育の推進、主にこの3つの観点から意見交換を進めたいと思います。どなたからでも結構ですので、自由に御発言をお願いします。

(関委員) 以前、授業を拝見した時も素晴らしいと思いましたが、今回はそのレベルを一段上げたかなと感じました。特に良かったのは、全員が積極的に参加する授業であるということ。見ているほうも大変楽しく、引き込まれていきます。今日拝見した授業の中では、地元の防災組織や地域の企業に、自分たちで調査に行き情報を集めるという点です。

それから、ちょっと気になったことは、持続可能な地域づくり、SDGsにつながる問題です。愛媛県では、例えばマイクロプラスチックの問題など、多くの学校で取り組んでいます。三崎高校では、どのような活動をしているのか興味があります。とにかく、時代とともにどんどん

課題が変わりますので、時代に合った課題を取り上げて、実行していくことがSDGsにつながると思います。これからは、絶対それは欠かせないと思います。

また、地域みらい留学という形で、以前より生徒数が増えました。ひよっとしたらコロナの影響もあるかもしれませんが、時代に合った働き方改革が求められていますので、そういう時代に生きるために、自分の自由度も含めながら仕事をしていく、そういう流れも考えられます。特に、南予地域では周辺人口が減っているのです、地域の産業に加えて教育環境は整備していかなければなりません。そういうことを行いながら、Uターン、Jターン、Iターンで人を呼び込んで、地域を活性化させていくことが必要だと思います。

以前から、地域の企業と行政、学校が協力して、地域を作っていく地学地就の推進ということが言われてきておりますが、県外からも来ていただく上で、全国的視点から見て特徴のある学校づくりというのが必要ではないかと思えます。

今、コロナ禍で、働くことと自分の生活の両立が必要という中、三崎高校は魅力のある学校だと思います。特に最近、不登校、いじめ、DVなどが社会的なテーマとなっておりますが、そこから脱却したい人、もっと自分の生活を大切にしたい人も増えていると思いますので、三崎高校のように特徴のある授業により、生徒の皆さんがやる気を出して、これからの人生を歩んでいけるような学校の在り方、特徴づくりを、県内にもっと広げていかなければならないと思います。よろしくお願ひします。

(中村知事) ほかにありますでしょうか。今の意見に対して、学校側から何かありましたら、どうぞ。

(竹本委員) 本日参観させていただきました授業や、三崎高校の魅力化に向けた様々な取組の紹介、誠にありがとうございました。今後も、魅力化をどんどん推進していく必要があると感じました。本県では、例えば今治北高校大三島分校において、大三島に移住した人たちに取材して「大三島お仕事図鑑」を作成し、移住に関するメッセージをまとめるなど、三崎高校と同様に、地域に対する愛着や誇りを醸成するなど地域の活性化に貢献しています。

地域に支えられ、生徒たちが様々な役割を果たすことによって、地域の方々に感謝され、生徒たちの自己肯定感が養われ、自信につながっていくのではないかと思います。先ほどの発表を聞きましても自信に満ち溢れていますので、高い教育効果が表れていると思います。このように、地域と連携しながら、地域の課題を解決し、地域の活性化につなげる取組をさらに普及させる必要があると思います。

今後、生徒数の減少により、学校の統合が避けられない状況にありますが、地域のニーズを踏まえた学科、コース等に十分配慮して、地域との連携を図りながら魅力ある学校づくりを行う必要があると感じました。

(中村知事) ほかにありますでしょうか。

(峯本委員) 三崎高校の取組内容を拝見して、活力、魅力があり、地域と一緒に取組んでいる生徒たちは、本当に大きな力を持っていると感じました。それで思い出したことがあります。知事が、平成26年度「いじめSTOP愛顔の子ども会議」の開会式の時に、子どもたちが、象を見たいという願いのために行動し、インドから象を贈っていただいたエピソードを紹介してくださいました。そして、夢を持って行動すれば、大きな力に結び付いていくと励ましてくれたことを思い出しました。

生徒には、興味・関心のある地域課題に挑戦して、成功した体験や、成功せず失敗しても試行錯誤を繰り返した体験を十分することによって、自分が社会の中で役に立つ大きな力を持った存在であると感じてもらいたいと思います。

県立学校の中には、三崎高校のほかにも、愛南ゴールドアイスクリームを東京オリンピック、パラリンピック選手村に提供するべく努力している生徒や、真珠を加熱して色を変化させる研究をする生徒、夏目漱石について英語で発信する生徒など、多様な生徒がいます。

より一層、これから県立学校が、県の研究施設や市町、大学、地元企業等の持つ専門性から学びながら、地域課題を主体的に考え、貢献する人材を育てていく必要があると思います。

(中村知事) ほかにいかがでしょうか。

(教育長) 先ほどから、魅力あふれる学校づくりが大事だという意見が皆さんから出ており、そのとおりでと思いますが、魅力化っていったい何だろうっていう答えが見出せていません。三崎高校の1年生の皆さんは、それぞれ県外から来られていますので、三崎高校のどこに魅力を感じたのか、教えていただけますでしょうか。

(三崎高校生徒) なぜ三崎高校を選んだのか、3人に共通して言えることは、先生の学校PRの仕方が素晴らしかったからです。地域みらい留学の説明会において、各県のいろいろな学校が集まっている中、三崎高校のブースは、他校とは熱量が違いました。

(三崎高校生徒) その熱意にどんどん引き込まれていき、気付いたら、ここにいました。ここは小規模校で何もありませんが、何もない中で、どう自分が動き、何ができるのかを考える力が欲しくて、また、何かを創り出したいと入学しました。

(三崎高校生徒) 私たちからすれば、歩いたところに海があり、山があり、また、学校で採れた果実で何かを作るといったことが別世界であり、全てが魅力に感じます。

(三崎高校生徒) ここは空気がきれいで、海もきれい。春は桜がきれいに咲きます。

(中村知事) 地元の人たちにとっては、都会の視点から見れば羨望の的のようなコンテンツが日常化してしまっていて、当たり前になっている

んです。でも、そこに気付く時が来ています。以前、松山市で仕事をしていた時、県外から松山市に修学旅行に来る学校は、年に4校程度しかありませんでした。そこで、なんとかしようとメニューを考えたとき、鍵を握るのは「島」だと思いました。そこには、非日常の世界があって、船に乗るという経験は都会では滅多にありません。地元では当たり前のように船に乗り魚を釣って、それをそのまま食べており、究極のレストランを味わっています。そういうところを体験してもらうことが、都会の学校からすれば非常に魅力的ではないかということで、メニュー作りをしました。広島から中島に船で乗りつけ上陸し、海の班と山の班に分かれて、海の班は「地引網」、山の班は「みかん狩り」の体験ゲームをしてから、また船に乗って道後温泉に行くといったコースを設定しました。ハードだけでは面白くないので、ソフトが大事であることに着目してひらめいたのが、中島の幼稚園児、全員集合です。船が接岸する時に、子供たちが小旗を振って、東京や大阪からの修学旅行生をお出迎えしたところ、もう大喜びでした。帰る時にも、幼稚園児に集まってもらいお見送りをしましたが、甲板の上で修学旅行生はぼろぼろ泣いていました。それで今では、年間百何十校が修学旅行に来るようになりました。

こういう素材の良さは、外から来た人にはわかるかもしれませんが、地元の人には当たり前で思っているのも、そこに逆に気付かせてもらえる役割を果たしてほしいと思います。何もないことが強みにもなります。例えば、今はITが進化して、若い人たちの遊びも私たちの頃とは全然違っており、パソコンやゲームなどが当たり前になっていますが、所詮ゲームというのはデジタルの世界なので、二進法で成り立っており、どんなに複雑そうに見えても0と1の組合せでしかありません。瞬間的な楽しさはあるけど、思考力を深める要素は非常に少ないと思います。思考力を深める要素というのは、アナログの世界、十進法の世界により多くあると思います。十進法のアナログの世界の遊びでは、海、山、川など、何もないところから、この山を利用してどんな遊びをしてみようかとか、この木を切ってどんな物を作ってみようかとか、常に遊びながら思考の繰返しを行っています。これが、コンピューターゲームの世界では、全くこういう経験ができませんので、意外と何もないことのほうが、想像力を培うフィールドとしては、むしろ勝っていると思います。そういうところを強みにしていけば良いのではないのでしょうか。

(山内委員) ヤマモモの商品化の授業を拝見して、普通の会社の会議みたいな光景だと感心しました。生徒の皆さんが、楽しそうに全員参加して、生き生きと前向きに取り組んでいます。こんな会社、社員だったら、会社もどんどん前に進んでいくと思いながら拝見しました。その中に、普通の会社でもやるべきこと、商品づくりのコンセプトや、商品に対する物語などを、きちんと考えていたので、もっといろいろなことを聞きたかったです。

こういう取組を繰り返して、これまで失敗もたくさんあったらと思うのですが、社会に出たときに、失敗こそ宝物になると思いますので、どんどん挑戦して失敗してください。何もしなかったら宝物はできないので、挑戦して失敗を重ねること。失敗のほうが後から、あの時ああいうことがあったなと思い出に残るので、今の高校生のうち、失敗を許してもらえるうちに、いっぱい失敗したらいいと思いますので、思い付いたことは先生に相談して、どんどんやってみてください。そういうことができる高校だと感じています。

(三崎高校生徒) やりたいことを先生が聞いてくれます。中学校時代は大規模校でしたが、ここでは、先生が生徒一人一人のことを理解してくれていることが嬉しい。私たちのアイデアがまとまっていなくても、漠然としたアイデアに対し、こうしたらどうと向き合ってくれるのが嬉しいです。

(山内委員) 今の意見を聞いて、先ほど見学した寮の落書きを思い出しました。「先生大好き」と書いてあって、生徒が気持ちを込めて書いたんだなど、すごくいいなと感じました。

(中村知事) プレゼンテーションにおいて、県外出身の彼らを引き付けた秘密はなんですか。

(三崎高校教員) なんとかしないといけないという思いです。存続という大きなテーマがありましたので、生徒を集めてこなければというのがスタートでしたが、集めることはゴールではありませんので、自分たちが生徒に三崎高校の魅力を説明する中で、元々あるものの良さに気づき、それを楽しさ、幸せに変えていく、その感覚がこれからの時代に必要とされていくことを実感しましたので、それを伝えたことが、もしかしたら良かったのかもしれないです。

(中村知事) 気持ちを言霊に乗せて届けた成果ですね。その場で体操やったりも。

(三崎高校教員) 体操はしませんでした。みっちゃん大福を食べたり、みきさんのぬいぐるみを持っていき、全力でPRしました。全国から集まっていますので、まず愛媛県、そして佐田岬を知ってもらうようにPRしました。

(高田委員) 本日拝見して、先生がとても生き生きとしていて、生徒たちもパワーと笑顔がすごく伝わってきました。なかでも、「たいせつ隊」や「せんたん さいせんたん」、「みさこう さいこう さあいこう」などの言葉がとても印象的で、素敵な雰囲気があるから、皆さんであれこれ考えて、こういう素敵な言葉が生まれるのかなと思いました。

先生がすごく素敵ですので、できればいろいろな所に行っていて、より愛媛を元気づけていただけたらと思います。生徒たちは、卒業して愛媛を離れたとしても愛媛をPRしてほしいし、もし可能であれば、戻ってきて愛媛で頑張してほしいと思います。

(中村知事) 先ほどのヤマモモのジャムについてですが、すごく良いプレゼンをしていたなと思います。私は商社に勤めていたことがあります。物を売る視点から、2点検討したら良いと思われる点がありました。

一つは、物をPRするときは、不特定多数の人が対象になるので、いろいろな考えの人がいることを覚悟しておくことです。ちょっとした言葉尻を捕らえるなど、マイナス思考の人に対して、対策を練っておく必要があります。その点からすると、最初に誰かが食べられるヤマモモを見つけたとします。ここは大丈夫です。次に、酸味が強く苦みが強いので、とてもじゃないが食べられないとします。ここにかみ付いてくる人がいると思います。そんな物を売るのかと、そういう発想が出てきます。その辺りを、例えば、おいしいけど後始末が大変だね、もうちょっと工夫したらもっとおいしくなるのにね、っていうくらいの存在にして、「いまいちフルーツ」など、もう一步といったような表現にしたほうがいいかなと、聞きながら思いました。

もう一つは、プラス思考の人たちによりアピールするには、これは調べたらいいと思いますが、栄養分にこれはっていうものが含まれているとか、これを食べると肌がつるつるになるとか、プラスの要因を一つ付け加えると、より一層インパクトがあるかなと感じました。また、皆さんで議論したらいいと思います。プレゼンとしてはとても良かったです。

(三崎高校生徒) ありがとうございます。

(教育長) 教育長になってから県内の各高校を回って、いろいろな授業を拝見しましたが、三崎高校が際立って特徴があるのは、皆さんの声大きいということです。発表の時、授業の時、ほとんど例外なく声大きい。先ほどの体操もそうですが、何のてらいもなく、気後れもなく、恥ずかしがらずに堂々と、いろいろなことを演じています。そして、何でも楽しそうにしています。先生にお聞きしたいのですが、ほかにも小規模校はたくさんある中、なぜ三崎高校の生徒だけ、こういう特徴があるのでしょうか。私は、県外生の存在が大きいのかなと思いますが、先生はどう思われますか。

(三崎高校教員) 基本的に三崎高校には、他人の失敗を馬鹿にする生徒はいないと思います。大きな声で発表したら笑われるのではないとか、みんなの前で元気に体操を踊ったら、あいつ張り切っているんじゃないかと思われるような感覚はないと思います。頑張っていれば、素直にあいつすごいなと受け止めることができる生徒が非常に多いと思います。そういう意味で、生徒たちが失敗を恐れていない気がしますし、教員も、失敗しても次頑張ろうやという感じですので、そういう雰囲気があると思います。

もう一つは、田舎だからこそ、少し引っ込み思案な生徒も多いですが、県外生は、とにかく食欲に前に前に、いろんなことをやりたい知りたい、という生徒たちが多いため、そこに引っ張られて、地元のおとなしい生

徒も、自分たちもああやっていいんだ、じゃあ私もやりたいです、というふうになっていることを感じます。

(教育長) 例えば、先生お二人が他の小規模校に転勤になって、全国募集で県外から生徒が集まってきたら、三崎高校と同じような魅力ある学校にできるのでしょうか。

(三崎高校教員) 全力で頑張ります。

(三崎高校生徒) まだ、いてほしいです。

(中村知事) 県の移住のPRのブースに一度行ってもらったり。

(山内委員) 今、生徒の募集で悩んでいる学校が多いと思いますが、先ほどの話を聞いていて、やはり先生の覚悟が大事だと思いました。先生が生徒の面倒をきちんと見る、学校を背負う、地域も背負う。あまり背負っても大変ではありますが、そういう先生が伸び伸びと生きる環境が、三崎高校にはあるのかなと感じました。

これから先、愛媛県は、先生がしっかりと活動できるような高校づくりというものが大事なのかなと感じました。

(三崎高校生徒) クラスマッチが昨日ありましたが、教員チームが少年少女のごとく和気あいあいとしていて、生徒から見ても先生同士の仲の良さがわかるので、先生と一定の距離を保ちつつも、良い意味で先生と生徒の距離が近い感じがします。三崎高校、すごく良いところです。私たちの親代わりにもなってくれています。

(高田委員) 「みさこうDAY」という取組がありますが、私服で登校し、チャイムも鳴らない、部活もない、時間を自分たちで考えて使うということを聞いて、すごく良いと思いました。

また、校舎を見学した際に、窓ガラスにPOPアートがあったんですけど、普通の学校であれば、そのようなアートは認めてもらえないと思いますが、そういうところに、生徒たちに主体性を持たせて、自分たちで考えて行動するような形にされているのかなと思いました。先生、生徒たちは、どう捉えられているのか、お聞かせください。

(三崎高校教員) 島根県の高校に視察に行った際に、POPアートを見た若い教職員がすごく良いと思ったことがきっかけですが、それを取り入れるに当たっては管理職もサポートしてくれ、先生たちも挑戦させてもらっています。そして、その姿を生徒たちも見てくれているのかなと思います。

(三崎高校生徒) 生徒が何かをしたいと思ったとき、こういう理由で駄目かなとやめてしまうのではなく、先生に言ってみようという思考になれるんです。先生がそれは駄目と否定せず、絶対に話を聞いてくれる環境があるので、自分で完結しないで挑戦できます。「したい」が言えます。

(関委員) 先生にお聞きしたいのですが、三崎高校の魅力をもっと高めるため、これをやりたいと思っていることがありましたら、お聞かせいただけますか。

(三崎高校教員) 生徒が今年すごく増えましたが、生徒のやりたいことを全部聞いてあげたいです。ヤマモモのことなど、いろいろな人にサポートしてもらえる仕組みを現在作っておりますが、南予中心ではなく県内外の多くの企業なども含めた大きな組織が作れたら、もっと生徒たちのやりたいことをかなえてあげられるのかなと思っています。すごく難しいことではあります。

また、三崎高校も苦勞して今の状況にありますので、それを他の学校でも参考にできるように、こうやったら良い組織が作れるといったように発信したいです。どの学校も残ってほしいので、そういう取組をやってみたいと思います。

(関委員) あと一つ、気になったことがあります。図書館の本が古いです。古くても良い本はありますが、時代に合わせた情報も必要ですので、もっと新しい本を、例えば、地域の人から古紙に出そうとしている本を提供していただくなど、そういうことも地域との結び付きになるので、やってみたらどうかと思います。

(三崎高校教員) ありがとうございます。ぜひ進めたいと思います。

(中村知事) 逆にこういう所だからこそ、濃い関係を維持しつつ、積極的にICTにチャレンジしてみても良いのではないのでしょうか。

(三崎高校教員) 伊方町の図書館も電子書籍の貸出しを始めましたので、1人1台端末と合わせて活用したいと思います。

(中村知事) はい、それではよろしいのでしょうか。今日は初めて、学校現場の皆さんにも参加していただく形で意見交換をさせていただきました。本日の会議は何かをまとめるものではありませんが、学校の存続というのは、こうした個々の事例についても、県全体で共有すべき課題としてテーマになってくると思います。三崎高校は今の段階での成功例です。生徒数が倍になったことや、現場がどういうことにチャレンジし、そういう思考の人たちが増えていったこと、こういったことの意味を聞くことによってヒントを持ち帰っていただき、教育委員会の議論に生かしていただけたらと思います。

先ほど、良いお話がありました。集めることがゴールではない。そこを目的化してしまうと、本来の目的から逸脱してしまいかねないので、そこをちゃんとわきまえながら、どうするかを考えていきたいと思いません。

最後に感想ですが、三崎高校の「みさき」というのは、皆さんが思っているより、とても良い響きなんです。特に私たちの年代は、「みさき」イコールおしゃれというイメージがあります。それは私たちの時代にはやった音楽の影響があるかもしれませんが、岬めぐりとか、荒井由実やサザンオールスターズなど、必ず「みさき」が出てきます。「みさき」というと、すごくおしゃれなイメージが、我々の世代には浸透していま

す。前から言っていますが、三崎で獲れるあじ、さばには、「はなあじ」、「はなさば」という名前が付いていますが、せっかくおしゃれな響きなのに、なぜ「みさきあじ」、「みさきさば」にしなかったのかということ、農林水産部長時代の教育長に軽く言ったことがありました。本当に良い響きだと思いますので、そこはぜひ知っておいていただけたらと思います。

それから、もう一つ印象に残っているのは、5年前、こどもの城の有効活用をしたいなと思って、高校生以下を対象にした子ども芸術祭というものを始めました。その第1回目の知事賞が三崎高校の作品です。今でも、こどもの城に展示されています。それは三崎高校らしくて、当時の3年生たちが中心になって、タイヤや木材など、海岸への漂着物を徹底的にかき集めて、かなり大きな作品を作りました。それが芸術作品としてもさることながら、環境問題に対するメッセージにもなって、誰が見ても圧倒で知事賞になった作品です。三崎高校の当時の生徒たちが、第1回子ども芸術祭の最高賞を獲得したことを語り継いでいってほしいと思います。

もう一つ、三崎へ来る道を通して思うのは、何年か前に妻と二人で、きらら館から三崎港まで自転車で走行し、迷いに迷って最後佐田岬に行き、往復80キロメートル走ったことがありました。とても大変でしたが、なんじゃこれってというような、すごい景観でした。こんな景観はほかにないと思いました。今はサイクリングというと、しまなみ海道が脚光を浴びていますが、おそらく愛媛県のサイクリングコースで次に来るのはここです。メロディーライン、そして双海、この両巨頭です。それくらいの可能性がある場所であることは、ぜひ知っておいてほしいなと思います。本当に素晴らしい光景です。

最後にもう一つだけ、我々の時代っていうのは、どちらかというところと社会が求める人材が、偏差値であるとか、記憶力であるとか、そういう画一的な人材を社会が求めていた時代でした。なぜならば、工場と同じ物を、いかに安く大量に作るかということが、日本の屋台骨を支えていた時代だったからです。それが、社会が変化し求められる人材が変わってきて、20年くらい前から、どちらかというところ課題解決型の人材を求めるようになって、大学などでも、そういう学部がどんどん増えています。それで、実はもう既に次の時代の人材が必要になってきており、課題解決も必要ですが、更に政策提案が求められています。今までのものがひずみを生んだので、それをなんとかしようとする力が求められ始めており、また、日本の得意分野が中国など他国に席卷され始めており、更に次の時代に進まないといけません。新たな時代を切り拓くようなプランニング、未来提案型の人材が必要になってきているのではないのでしょうか。そこで大事になるのが、発想力であり、アナログです。デジタルは利便性を向上するツールにすぎず、あくまでも主役は人間ですので、

デジタルからもたらされる発想よりも、アナログからもたらされる発想に、ひょっとしたら未来を切り拓くヒントがあるかもしれません。そういう意味で、アナログに囲まれている三崎高校は、毎日毎日が発想力を鍛える場であり、皆さん自身がそういう場に身を置いていると意識すると、周りの人間もどんどん変わってくると思います。大いに成長してください。ありがとうございました。

(事務局 副教育長) 大変有意義な時間をありがとうございます。以上を持ちまして、令和2年度愛媛県総合教育会議を閉会いたします。本日はどうもありがとうございました。

閉 会 (午後3時9分)